

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月25日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520159

研究課題名（和文） 戦国末期における東国武将の文化継承に関する研究

研究課題名（英文） A Study of the Succession of the Culture by Samurai lived in Eastern country at the last years of Warring States period

研究代表者

弓削 繁 (YUGE SHIGERU)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：10127798

研究成果の概要（和文）：戦国末期は文化が中央から地方へ、公家から武家・町人等へと拡散し、次第に貴族的なものから世俗的なものへと変容を遂げていく時期にあたっているが、本研究は古河公方の重鎮一色直朝（月庵）が編纂・著述した『月庵酔醒記』の注釈・典拠研究に基づいて、この過渡期の文化継承のありようを具体的に明らかにしたものである。注釈・典拠研究の成果は3冊の注釈書（うち1冊は準備段階のもの）に、また注釈・典拠研究から見えてくる文化継承上の諸問題に関する研究成果は1冊の研究書に結実している。

研究成果の概要（英文）：This Study is intended to clarify the actual situation of the transformation of the culture in the last years of Warring States period.

It's based on a study of the source on *Getsuan-suiseiki* written by Issiki Naotomo who served Koga-kubou.

As a result of this study, we were able to clarify the transient figure of the culture from the Medieval Period to the early modern times concretely.

We wrote down the results of this study in the next books.

(1) Minobe Shigekatsu, Hattori Kouzou, Yuge Shigeru, *Getsuan-suiseiki* Vol. 2～3, published by Miyai shoten in 2008～2010

(2) Hattori Kouzou, Yuge Shigeru, Tsujimoto Hironari, *Reproduction of "chi" in the Medieval Period -Studies and Index of Getsuan-suiseiki*, published by Miyai shoten in 2012

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：中世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：月庵酔醒記・一色直朝・戦国末期・文化継承・知識

1. 研究開始当初の背景

『月庵酔醒記』が一般に知られるようになったのは1981年に鈴木棠三が古典文庫に影印本文を収載したのが最初である。当初は著

者の月庵が誰であるか不明であったが、まもなく和歌史研究者の指摘によって一色直朝であることが明らかになる。次いで、翌1982年には赤瀬信吾により月庵の自注本とされ

る『桂林集注』が京都大学国語国文学資料叢書の一冊として刊行され、月庵の文化活動が次第に明らかになってくる。こうして、『月庵酔醒記』はその内容の多様さと面白さもあって、徐々に研究者の関心を集めていく。「なぞ」に注目する鈴木棠三、「巷歌」を問題にする井手幸男、「教訓」や「鷹書」を論じる中田徹、説話・伝承に関心を寄せる徳田和夫・廣田哲通らである。

そうした中、自然の流れとして、個々の断片的な記事にとどまらず『月庵酔醒記』の総体を明らかにしたいという思いが醸成されてくるが、最初にこの課題に取り組んだのは中田徹、平成4年5月の中世文学会での「月庵酔醒記の世界」と題する研究発表であった。これはそれぞれの記事の典拠や類似資料を網羅的に指摘するものであり、『月庵酔醒記』の総体的な研究に先鞭をつけるものであった。しかし、中田の研究は個人によるものであり、多種多様な分野にわたる記事を収める本書の性格上、そこには自ずと限界があった。

その後、私たちは本書の重要性に鑑み、美濃部重克の提案に従って1998年6月に専門分野を異にする10名の研究者が集い、「月庵酔醒記輪読研究会」を始めたのであった。以来約10年にわたり基礎的な調査および研究を続けてきた。

本研究はこの間の十分な経験と成果を踏まえて、共同研究という形で始められたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古河公方足利晴氏・義氏が仕えた一色直朝（月庵）が編纂・著述した『月庵酔醒記』の研究をとおして、戦国末期における東国武将の文化継承の実態を明らかにするところにある。

すなわち、戦国末期は文化が中央から地方へ、公家から武家・町人等へと拡散し、次第に聖なるものから俗なるものへと変容していく時期に当たっているが、そこには、種々の伝承や言説が生成や管理の場から遊離して、いわゆる〈知識〉として一人歩きするという文化的な状況が存在する。そうした中で、自立し始めた種々の〈知識〉を百科辞書的に収集した書物が生まれてくる。その一つが『月庵酔醒記』である。

先、久堅のあめにしては七代の御神、あらがねの土にしては五代神明のはじめをあらはし奉りしより以来、すべらきのたゞしき政をしるし、武士のかしこき道をつたへ、漢朝の風雅、あらたなる物語、近代の誹諧等に至て、きゝにまかせ侍ぬ。祖意・教意を書加事は、今予が老耄の口業也。かくて、もゝえに咲し梅花の、色にそめ香に匂へるよりして、四時の草木、わきて草中仙の粧、

百種の色々に、古人の賢作黙止がたく、花鳥風月の詠も、其興、限なかるべし。しかのみならず、男女のわざはひ、夢裡のあさはかなる事までも、聞すてがたきまよひの愚なる事にこそ侍けれ。事皆述不作。

これは序文の一節であるが、『月庵酔醒記』には「事皆述不作」とあるとおり、多く他書からの抜き書きや聞き書きとして、神祇・王法から文学・芸能・本草・医学・易暦・なぞなど・俗諺等に及ぶ実にさまざまな〈知識〉が記しとどめられている。いずれも本来はそれぞれの時と場における興味や必要性に裏付けられた言説だったはずであるが、今それら一つ一つの記事について、その意義や由来を十全に捕捉することは容易なことではない。それには関連資料の博搜と精緻な注釈作業が不可欠になってくるからである。われわれが10年来の「月庵酔醒記輪読研究会」をベースにして、複数の研究者による共同研究という態勢をとった所以である。

如上、本研究の特徴は、従来比較的研究が手薄であり、観念的な理解にとどまっていた、戦国末期という時代の過渡的な文化のありようを、『月庵酔醒記』の本文の理解をとおして具体的に跡付けようとするところにあるといつてよい。

3. 研究の方法

本研究は「月庵酔醒記輪読研究会」を基盤にしており、そのメンバーの中から弓削繁を研究代表者に立て、美濃部重克（死去により、平成22年度まで）・小林幸夫・榊原千鶴・小助川元太を研究分担者として、それを研究協力者として他のメンバー（服部幸造・辻本裕成・中根千絵・徳竹由明・藤井奈都子・日沖敦子・佐々木雷太）が支えるという態勢をとってきた。それ故、研究代表者と研究分担者のチームワークのみならず、輪読研究会を主導した美濃部・服部の指導力と、それに応えた若手研究者の意欲も本研究に与って大なるものがあつた。

(1) 4年の研究期間のうち、最初から2年半の間は、準備段階から続いてきた月1回4時間の輪読研究会の場をとおして、注釈・典拠研究に力点をおいてきた。そこでは、より厳密な注釈をめざして、まずそれぞれがテキストの分担箇所について調査・研究の成果を報告し、次いで参加者全員で討議、検証するという手続きが採られた。

その際、各自が必要に応じて実地に文献調査や現地調査なども行った。21年度に弓削・服部・佐々木の3名が月庵ゆかりの幸手市周辺の遺蹟等を調査したのはその一例である。

(2) 残りの1年半は引き続き新しい典拠の発見に努めるとともに、このような基礎研究を踏まえた上で、そこから見えてくる文化継

承上の諸問題へと問題意識を深化、発展させてきた。この期は隔月1回4時間の研究会を開催、各回1、2名ずつが、それぞれ専門分野から推し進めてきた研究の成果を報告し、それを全体で検証し、体系化を図りつつ、論文化するという方法を採用してきた。そして、時には、例えば23年度に外部から専門家を招いて「鷹書」に関する講演を聞くなど、手薄な分野を補う努力も怠らなかった。

また、今後の研究に資するため『月庵醉醒記』の主要語彙の索引を作成することとし、編集方針を確認したが、実際の作業は主に研究協力者の服部が担当した。索引は『醉醒記』の本文に多々確定し難い箇所があるところから、いっそう必要になるものと思われる。

4. 研究成果

(1) 『月庵醉醒記』の注釈・典拠研究に関する成果は、中世の文学『月庵醉醒記』上・中・下の3冊(うち上巻は準備段階のもの)に結実している。

上巻の場合、本文123頁に対して補注133頁、中巻の場合、本文108頁に対して補注297頁、下巻の場合、本文116頁に対して補注290頁という他に類を見ないほどの詳しさであるが、これは単に注釈が詳細であるばかりではなく、本文の意義を通史的に見定めようとしているところに大きな特色が認められる。

(2) 上記の注釈・典拠研究を踏まえた文化継承に関する問題については、最終年度に刊行した研究書『中世〈知〉の再生「月庵醉醒記」論考と索引』に集約されている。

所収論文のうち、研究代表者の弓削のものは、歌鞠を例にして、都の伝統文化が地方に継承されていくさまを具体的に跡付け、研究分担者の小林の論は、種々の「詠歌物語」によって、当時の和歌・連歌の会席という文化継承の場を照射しており、小助川の論では、古辞書や類書への関心が「政道」記事なども通底することを指摘して、そこに月庵の編述意図を読み取っている。また、榊原の論考は、この期の「女訓」が近代にいたるまで脈々と受け継がれてきたことを明らかにしている。

同書には他にも研究協力者(輪読研究会メンバー)6名と外部の2名の論考も収められている。

こうして、(1)の通史的な視点に立った詳密な注釈と(2)の多角的な論考とによって、戦国末期の文学史ないし文化史上の過渡的な様相が、従来の観念的な理解を超えて、相当に明確な輪郭をとって解明されるに至った。

本研究の成果は、今後この時代の文化的状況を理解する上で一つの道標になるはずで

ある。

(3) なお、本研究の総括として、この報告書とは別に24年3月に「一、研究の概要」「二、研究論文」「三、資料翻刻」から成る別冊の「研究成果報告書」(全133頁)を作成して研究者に提供した。「二、研究論文」には佐々木雷太の新稿が、また「三、資料翻刻」には弓削繁の蓬左文庫本『無名抄』の翻刻が収められている。佐々木の論は「日用類書」への関心という『月庵醉醒記』の重要な一面を解き明かして、本研究の課題を補完してくれるし、弓削の翻刻は『無名抄』の主要な一本を初めて活字化したものとして今後の研究に有用である。

おわりに、本研究および輪読研究会は、若手研究者の育成をも目論んでいたが、この点でも所期の目的を達することが出来た。今後学界を裨益するものと期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

- ① 弓削繁、蓬左文庫本『無名抄』翻刻、平成20年度～平成23年度科学研究費補助金研究成果報告書、査読無、2012、P.109-133
- ② 佐々木雷太、『月庵醉醒記』と『事林広記』-室町期における「日用類書」の受容について-、平成20年度～平成23年度科学研究費補助金研究成果報告書、査読無、2012、P.89-108
- ③ 弓削繁、『月庵醉醒記』の〈知識〉の由来-『無名抄』依拠記事と蹴鞠記事から、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P.211-229
- ④ 小林幸夫、『月庵醉醒記』の詠歌物語-歌話と故実、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P.31-52
- ⑤ 榊原千鶴、道歌の効用-『月庵醉醒記』と福羽美静にみる明治期女性教育、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P.167-182
- ⑥ 小助川元太、『月庵醉醒記』〈政道〉考-「古人之語三十一」を中心に、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P.75-98
- ⑦ 榊原千鶴、女子用書簡文範の鼈頭と軍記物語-『通俗書簡文』を手がかりとして-、日本文学、査読有、60巻7号、2011、P.44-52
- ⑧ 服部幸造、『月庵醉醒記』の世界-中世から近世へ、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P.9-29

- ⑨辻本裕成、歌人月庵の和歌と『月庵醉醒記』、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P. 231-253
- ⑩徳竹由明、「富士の根方の法華宗の夢」考—後北条氏と富士の根方の法華宗、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P. 121-131
- ⑪藤井奈都子、穆王の馬、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P. 53-74
- ⑫日沖敦子、浄土憧憬—檀王法輪寺蔵「中将姫臨終感得來迎図」をめぐって、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P. 133-166
- ⑬佐々木雷太、『月庵醉醒記』「鎌倉の地蔵桜」攷、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、査読無、2012、P. 99-119
- ⑭服部幸造、『月庵醉醒記』の世界—その一面、福井大学言語文化学会国語国文学、査読無、50号、2011、P. 1-11
- ⑮弓削繁、ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本『長明無名抄』翻刻、岐阜大学国語国文学、査読無、37号、2011、P. 15-52
- ⑯小助川元太、僧の自伝の系譜—中世における〈僧の自伝〉を中心に—、(中世文学と隣接諸学2) 中世文学寺院資料・聖教、査読無、2010、P. 610-634
- ⑰榊原千鶴、「世界の花ならむ事を望む」—跡見花蹊にみる“知”の継承と明治初期の女性教育、名古屋大学文学部論集(文学)、査読有、56巻、2010、P. 135-149
- ⑱佐々木雷太、一騎討ちによる発心譚—中世から近世に至る享受と変容について—、佛教文学、査読有、34号、2010、P. 48-59
- ⑲小助川元太、『後素集』の『帝鑑図説』利用—狩野一溪の画題理解に関する一考察—、国語国文、査読有、78巻6号、2009、P. 1-18
- ⑳榊原千鶴、明治二十四年の『からすまる帖』—福羽美静にみる戦略としての近代女性教育—、名古屋大学文学部論集(文学)、査読有、55巻、2009、P. 143-156

[学会発表] (計8件)

- ①中根千絵、曲直瀬道三と『類証弁異全九集』と『月庵醉醒記』、月庵醉醒記研究会、2011・4・2、南山大学
- ②小助川元太、『月庵醉醒記』の〈政道〉〈後鳥羽院番鍛冶次第〉、月庵醉醒記研究会、2011・2・19、南山大学
- ③弓削繁、『月庵醉醒記』の『無名抄』依拠記事をめぐって—、月庵醉醒記研究会、2010・12・4、南山大学
- ④小助川元太、『後素集』の画題解説と漢故事和訳—『語園』との共通説話を中心に—、伝承文学研究会、2010・9・5、学習院女子

大学

- ⑤小林幸夫、『月庵醉醒記』—古河公方の文化サロン—、月庵醉醒記研究会、2010・7・3、南山大学
- ⑥佐々木雷太、殺生と菩提—『月庵醉醒記』所引『沙石集』・『雑談集』をめぐって—、寺社縁起研究会東海支部例会、2009・8・24、中京大学
- ⑦佐々木雷太、『月庵醉醒記』「鎌倉の地蔵桜」考—謡曲「田村」と足利一門の地蔵信仰—、説話・伝承学会、2009・4・19、天理大学
- ⑧服部幸造、『月庵醉醒記』にみる中世と近世、伝承文学研究会、2008・8・31、静岡文化芸術大学

[図書] (計4件)

- ①服部幸造・弓削繁・辻本裕成、三弥井書店、中世〈知〉の再生『月庵醉醒記』論考と索引、2012、P. 1-424
- ②服部幸造・美濃部重克・弓削繁、三弥井書店、(中世の文学) 月庵醉醒記(下)、2010、P. 1-320
- ③日沖敦子、毛髪で縫った曼荼羅—漂泊僧空念の物語—、新典社、2010、P. 186
- ④服部幸造・美濃部重克・弓削繁、三弥井書店、(中世の文学) 月庵醉醒記(中)、2008、P. 1-325

6. 研究組織

(1) 研究代表者

弓削 繁 (YUGE SHIGERU)
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：10127798

(2) 研究分担者

美濃部 重克 (MINOBE SHIGEKATSU)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：90065475

小林 幸夫 (KOBAYASHI YUKIO)
東海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：50249299

榊原 千鶴 (SAKAKIBARA CHIZURU)
名古屋大学・男女共同参画室・准教授
研究者番号：50313979

小助川 元太 (KOSUKEGAWA GANTA)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：30353311